

問一

日本に渡来したキリスト教徒は、神が万物を分け隔てなく純粹に慈しむことを意味する「愛」という語が、日本語ではよこしまな不義に連なる意味をもつために、苦心の末に「大切」という語を用いざるをえなかったということ。

（解答欄 4 行）

問二

明治以来の日本語は外来文化を摂取し、深く考えもせずにあ案出された言葉があふれたために、意味の違いを区別できないまま曖昧に言葉を利用して却って苦勞を強いられ、言葉の文化伝統に浴することなどできていないという考え。

（解答欄 4 行）

問三

僅かな語で多様な表現ができる日本語の都合のよさに安心してしまつて、物事の本質を見極め知るために言葉を正確に用いる訓練がなおざりになっているのではという不安。

（解答欄 3 行）

問四

いずれ必ずそうなるとうわかつている人生上の真実は、それを予め知っていたとしても、やはりそれに見舞われ後悔することが自明であるため、教訓としても意味がないから。

（解答欄 3 行）

問五

文筆家が恋愛を主題にする意味は、動物的本能や万古不易な事実を描くことや、万人に通じる答えを導出することではなく、書き手の生活や人生に即した真実を本質的に捉え表現しようとする人間固有の文化的営みだと考えている。

（解答欄 4 行）

問一

子規が、観察の徹底により見出される美を説く点には共感できたが、源氏以来の歴史的連想を一切排除すべきとしたのは、夕顔の美の半面を否定すると思われたから。

（解答欄 3 行）

問二

陳腐さを脱しようとして眼前の対象をありのまま写すことは、先人が練り上げてきた多様な連想をいかに取捨選択し、巧みに配合するかという工夫を無視してしまうという点で、かえって陳腐な作を生んでしまうという点と。

（解答欄 4 行）

問三

春雨を見てそこから連想する多様な情趣は、先人が長年の間に少しずつ洗練させた春雨の美に由来しており、鑑賞者個人が見た瞬間に直感する類いのものではないということ。

（解答欄 3 行）

問四

写生を重視し伝統的思想形式の刷新を目指してきた俳句革新運動も、写生を過度に強調すれば、旧弊だけでなく伝統が育んだ豊かな想像力をも奪ってしまうということ。

（解答欄 3 行）

問五

俳句革新運動は、旧弊を打破する上で写生が持つ意義を説いてきたが、一定の成果を築き上げた現在から顧みれば、その成果は、目前の事象に先人が連想を重ねてきた努力に新たな趣向を加えたものにすぎないと認識できるといふこと。

（解答欄 4 行）

問一

(A)

作者の、皇太子になるべき地位と優れた才学を持ちながら、なぜか幼い時からの物の怪による重病で皇太子になれなかった式部卿のみこの宿縁を、残念に思う気持ち。

(解答欄 3 行)

(B)

式部卿のみこの、吉野の阿闍梨の修法で病が寛解し、仏の靈験の尊さを思い知ったことで、長年出家したいと思いつつ病で果たせずにいたことを、残念に思う気持ち。

(解答欄 3 行)

問二

有名な桜の名所である吉野の花の盛りを見たいと式部卿のみこは思いなさって、吉野へのおでましは、かなりの部分は花への興味に促されなされたのであった。

(解答欄 3 行)

問三

出家するならこのような山に最後までこもって、俗世を二度と見ないことが、心が濁りなく澄んで、仏道修行もゆるぎなく、修行の成果が期待できるに違いない。

(解答欄 3 行)

問四

吉野の山深い所で八十歳を迎えるまでの長い間ひたすら仏道修行に打ち込み、その甲斐があつて、阿闍梨の弟子になりたいと申し出る高貴な式部卿のみこに出会えたことを、名誉に思い喜ぶ気持ち。

(解答欄 4 行)